

あとがき

コロンビアに赴任する際は、「くれぐれも気をつけて」と言われて出発しそのときはさほど違和感はなかったが、帰国した際に多くの方から「よくご無事で」と迎えられると、コロンビアに関する一般日本人の固定観念がいかに強いかを思い知らされ、衝撃を受けた。最初の頃は、「いやいやコロンビアはすっかり治安が良くなり、ボゴタはいまやワシントンよりも安全な首都になったんですよ」と説明していたが、同じ科白を繰り返しているうちに、コロンビアに関する情報不足というか、情報の歪みが半端ではないことを痛感した。

一方、ほとんどの人がコロンビアは南米の一カ国であり、旧スペインの植民地で、その国名はアメリカ大陸を発見したコロンブスに由来していることを知っており、なかにはコロンビアは「三C」のうちの一カ国であり美人で有名だという知識を披瀝して、「女性に気をつけて」と大変ありがたいご忠告を下さる方もいた。

しかし、コロンビアに生活して痛感したことは、確かにコロンビアは他のラテンアメリカ諸国と歴史、人種、言語、宗教、文化および社会構造と共通点も多いが、他方、政治的伝統、言論の自由の伝統、経済運営、一般犯罪の原因など相違点も多く、デイビッド・ブツシユネルが指摘したように、ラテンアメリカに共通するモデルでコロンビアを説明することができないという特徴がある。これが、諸外国にコロンビア研究者が少ないひとつの理由であり、また、それ故にコロンビアの真実の姿が国外から発信されず、専らコロンビア国内の知識人の見方が流布した原因であると考えられる。

ベルリンの壁崩壊後、コロンビアの知識人の自分の国の形を見る視点が変わってきたにもかかわらず、いまだに我が国にその動きが紹介されていないのは残念でならない。

本書は、このような動機からコロンビアのビオレンシアに焦点を当て、それが今日のどのような実態にあるのか、できるだけ最近の文献を踏まえて紹介したものである。悪魔払いという副題に驚かれた方も多いと思われるが、私としては、コロンビアのイメージにとり憑いた悪魔を退治したいという強烈な思いから、あえてどぎつい表現を選んだところである。また、副題の「若き国」というのは、コロンビアの人口構成を見ると六五歳以上年齢の割合が六三%と極めて低く、日本の昭和四〇年頃と同じ水準であることを表現し

た。現在の我が国のこの割合が二二七％に達していることを考えると、約半世紀前の「いざなぎ景気」前の日本の人口構成と同じであるのは大変な利点である。この若い人口構成は今後の経済発展が期待される大きな要因である。コロンビアの人口の増加率を見ると、第二章の表5のとおり、一九六〇年代と一九七〇年代に年率三％台の高い伸び率を示し、約二〇年で一〇〇〇万人の人口増となっているので、これが今後の高齢化率上昇の潜在的圧力となると思われるが、いまだ一五年程度の余裕があるので、その間に社会問題を解決しておく必要がある。

なお、コロンビアの人口増加率が一九八〇年代から二％台に低下し、現在一・八％になっているが、これは治安の悪化という要因の他、我が国の援助により「家族計画」プログラムが普及したことの効果であるといわれている。コロンビアの家族計画協会の副会長をしている方から、もしコロンビアで家族計画を導入していなかったら、現在のコロンビアの人口は六〇〇〇万人を超えていただろうと大変感謝されたのを覚えている。確かに、コロンビアでは、カトリック教会の影響が強く、子だくさんの家族が多い。例えば、ガルシア・マルケスは一人兄弟で、さらに父親は家庭外で五人の子どもがあったし、彼の祖父は家庭内外で二七人の子持ちであったといわれている。

「若き国」コロンビアが、これからいつその経済発展を続けていくための条件のひとつは現在GDPの五%程度相当という極めて高い治安対策のための国の支出負担を削減することである。そのためには、ゲリラ組織の武装解除を何とか達成しなければならない。最大のゲリラ組織であるFARCは、国民の支持を失い、かつその通信網を政府軍に完全に抑えられているので、従来のような作戦行動が極めて難しくなってきたておりじり貧状態にある。資金源を麻薬に頼ることも、次第に困難になってきている。このような事情を考慮すると、FARCと政府との停戦和平協定が実現するのはそんなに遠い先ではないという予感がする。

コロンビアは二〇〇九年、香港上海銀行（HSBC）頭取のマイケル・ジョーイーガンによりBRICSに次ぎこれからさらに発展する国のCIVETS（コロンビア、インドネシア、ベトナム、エジプト、トルコ、南アフリカの六カ国の頭文字、英語でじゃ香猫の意味がある）グループのトップに位置づけられている。現に、二〇〇二年から八年間続いたウリベ政権時代に、経済は著しく改善し、株価指数は約一〇倍に上昇した。また、世銀のドゥーイング・ビジネス・ランキング（二〇一〇年）によれば、コロンビアは世界一八三カ国中三七位で、ラテンアメリカ諸国のなかでは、プエルトリコ（三五位）に次いで二位、ブ

ラジル、メキシコより上位にある。また、評価項目のなかで「投資家保護」については、米国と並んで五位と高い評価を受けている。

このように国際的にもコロンビアの発展可能性が高く評価され、治安が著しく改善して欧米各国のコロンビアへの直接投資がここ数年急増しているなかで、日本のコロンビアへの投資が二〇〇一年以降ほとんど停滞している状況は憂慮に堪えない。さいわい二〇一〇年末に日本とコロンビア間の投資保護協定交渉が妥結し、今後自由貿易交渉の開始に向けて展望が開けてきたことは、両国関係にとって明るい材料である。

本文では触れることができなかったが、コロンビアへの移民の歴史も他のラテンアメリカ諸国への移民と異なり、極めて特異なものであった。すなわち、一九二四年（大正一三年）米国で実質的な排日移民法である移民法が成立し日本人の移民が事実上遮断され、また、ブラジル、ペルーなどで「排日」運動が起きた状況のなかで、コロンビアの作家ホルヘ・イサックの小説『マリア』を読んだ五人の「海外植民学校」の学生が、この小説の舞台となったコロンビアのバジェ平原に魅せられ、一九二三年（大正一二年）に農業実習生として渡航したことから始まる。彼らの研修報告が契機となって、一九二九年から一九三五年にかけて三次の移住が実施され、合計二〇家族（実際は二四家族）一五九人がバジェ平原

に入植したのが移民史である。この『マリア』という小説は、バジエ・デル・カウカ県のアンデス山脈の中央山系西麓に所在した大農場アシエンダ・パライス（天国の荘）を舞台に展開する若き青年エフラインと美少女マリアとの淡き悲恋物語である。現在バジエ・デル・カウカ県の日系人は、約一二〇〇人に増えているが、昭和初期の移住者が夢に見た『天国』が本当にコロンビアに実現することを期待せずにはいられない。

先にも述べたように、コロンビアは「若い国」である。国民の皆が自分の国を美しい国であると感じ、将来への希望と誇りを持っている。また、貧しさのなかでも明るさを失わず、現状に満足し、我が国が忘れてしまったように見える将来への自信と自分の国をより良くしようという意気込みが澆漓と息づいている。

過去の悪夢のようなリオレンシアの災厄から脱皮しようとは必死に努力しているコロンビアの真実の姿について、できるだけ多くの方に認識していただくことを願ってやまない。

なお、本書でたびたびコロンビアの特異性について言及したが、最も他のラテンアメリカ諸国と異なっていると思われる点は、経済運営の健全性である。他の国々が一九八〇年代および一九九〇年代にハイパー・インフレーションを起こし、債務危機に陥ったにもかかわらず、コロンビアはこの二つの経済危機を経験していない。従って、過去一〇〇年間

を振り返っても経済成長率は平均5%でその変動が最も小さい国である。この理由は、コロンビアにはポピュリストの政治家が出なかったという極めて稀有な歴史を持っていることにあると思われるが、これら経済問題の論点については、紙数の関係で割愛せざるを得なかった。他日、機会が与えられれば出版したいと考えている。

本書を書くに当たっては、大変多くの方々から貴重なご教授、ご示唆、ご指導を賜っているが、ここではとくにお世話になった数名の方の名前を記して感謝の意を表したい。まず、フランシスコ・サントス・カルデロン前副大統領からは筆者の疑問に正面から答えていただき、エドゥアルド・ポサーダの本を推薦していただいた。マウリシオ・カルデナス（鉱業大臣（元））には、コロンビア経済全般にわたる勉強の手引きをしていただいた。ミゲル・ウルツティア、ロス・アンデス大学教授（元コロンビア共和国銀行総裁）には、コロンビア経済の特質とくにポピュリズムがコロンビアに存在しない理由を教わった。エドゥアルド・ウイスネル元大蔵大臣には、一九九一年憲法制定後の政策運営の推移について解説していただいた。ロベルト・スタイナー高等研究財団理事長からは、一九九〇年以降のセサル・ガブリア大統領の構造改革について詳細に分析した本を贈呈された他、日常的に筆者の質問に適切なご指導をいただいた。

また、本書に利用した各種データについては、在コロンビア大使館の鈴木康久参事官はじめ館員の皆さんにお世話になった。また、筆者のスペイン語能力の不足を大使当時の秘書のアマリア・デ・グレイフさんに補ってもらった。彼女とのメール交信によって、どれほど助けられたか測り知れない。

妻の眞子は、この原稿の最初の読者として適切なコメントをしてくれた。さらにテニス仲間の小林和男元NHK解説委員には本を書く基本を手ほどきしていただいた。

また、筆者の手書きの原稿を電子媒体にのせる作業は、妻眞子、長女千穂、長男豊聡、次男朋篤が分担して手伝ってくれた。

最後に、アジア経済研究所研究支援部の真田孝之氏には拙稿の修正に辛抱強くおつき合いただいたき、本書の出版にご協力いただいた。

本書を、三年間辛抱強く息子の帰国を待ってくれた米寿を迎えた両親と、戦友として外交活動を支えてくれた妻眞子に捧げる。

二〇一一年二月一〇日

川崎市の寓居にて